

高等学校における聴覚障害生徒に対する支援や配慮の現状とその課題に関する調査研究

浪川 元秀

I 問題と目的

聴覚障害児は特別支援学校だけではなく、通常の小・中学校や大学等の高等教育機関にも数多く在籍している(文部科学省,2012; 加藤・我妻・藤原,2009; 日本学校保健会,2004; 根本,2006; 日本学生支援機構,2012)。その中間にあたる高等学校についても聴覚障害生徒が少なからず在籍していることが考えられる。

通常学校に在籍する聴覚障害児は、聴覚障害の程度にかかわらず、「先生の声が聞こえにくい」といった聴覚的な困難をはじめとし、コミュニケーションや人間関係において問題が起こりやすい(日本学校保健会,2004; 佐藤・杉内・齊藤・調所,2008; 根本・石原・小畑,1995; 四日市,2006)。それらに対する支援や配慮が、通常学校に在籍する聴覚障害児には必要である。

しかし、高等学校における支援や配慮の状況については、小・中学校や大学等の高等教育機関に比べ、調査研究等も少なく不明な点が多い。今後、高等学校における支援や配慮のあり方を考えるためには、まず支援や配慮の実態を明らかにすることが求められる。また、学校生活における過ごしやすさは、支援や配慮の状況だけでなく、教師や同級生等の関わり方次第によっても変わってくると考える。

そこで本研究では、高等学校における聴覚障害生徒が有する聞こえやコミュニケーションの問題、およびその学校における支援や配慮の状況やその背景、教師や同級生の関わり方について明らかにする。それを通して、高等学校における聴覚障害生徒への支援や配慮のあり方を検討する。

II 方法

大学に在学する聴覚障害学生で以前、通常の高等学校(高等専門学校を含む)に在籍したことの者を対象とし、2012年7月中旬～10月中旬に

郵送法や手渡し、メールによる質問紙調査を行った。調査項目は鈴木・原・岡本(2002)や伊東・四日市(1999)等を参考にし、聴覚障害者7名への予備調査を経て作成した。項目は以下の通り。

1 フェイスシートの項目

性別、高校生当時の聴力レベルなど(12項目)

2 主に授業における支援や配慮に関する項目

学校側からの支援・配慮など(7項目)

3 授業外のコミュニケーションに関する項目

会話の理解しやすさの要因など(10項目)

4 聞こえの状態や聞こえにくさに対する対処と影響に関する項目

会話中は口元を見るかなど(10項目)

5 その他の項目 ※自由記述

学校生活上における支援や配慮について

III 結果と考察

1 回収数とフェイスシートについて

71名の回答があり、このうち対象が異なるとみられた1名を除いた70名を有効回答とした。

フェイスシートについて、性別は男が31名(44%)、女が38名(54%)、無記入が1名(2%)であった。性別による回答の違いはあまり見られなかった。高校生当時の聴力レベルは70dB以上(高度難聴)が41名(59%)、50～69dB(中等度難聴)が7名(10%)、30～49dB(軽度難聴)が2名(3%)であった。無記入なども多く、結果として、軽度・中等度難聴の回答者が少なかった。このため、聴力レベルによる回答の違いは検討していない。

2 主に授業における支援や配慮について

学校側からの支援や配慮について全体の7割強が「支援や配慮あり」と回答した(図1)。多かった支援や配慮は「試験の別室受験などの特別な措置」であり、少なかった支援や配慮は「手話通訳者の派遣」であった。

また、授業中の教師からの支援や配慮は9割弱

が、授業中の同級生からの支援や配慮は8割弱が「あった」と回答した(図2)。多かった支援や配慮は、教師からは「座席位置の配慮」、同級生からは「ノートを見せてもらった」であった。一方、少なかった支援や配慮は、教師からは「個別に指導する時間を作る」、同級生からは「授業の要点を教えてもらった」であった。

支援や配慮の内容を見てみると、「座席位置の配慮」というような比較的支援や配慮がしやすいものは多いのに対し、「個別に指導する時間を作る」というような支援や配慮に特別な時間を割く必要のあるものは少ない傾向にあることが分かる。

支援や配慮を受けたことに対する所感としては「とてもよかったと思う」(41%)よりも「少しよかったと思う」(55%)が多かった。支援や配慮を受けて良かったとは思う人は多いが、それが十分なものであるかどうかまでは言い切れない結果となった。

支援や配慮の課題としては、支援や配慮を受けていない人も1~2割前後みられ(図2)、本来は必要なのに受けられていない人がいる可能性がある。

また、授業において何らかの困難があった時の対処としては「独学など、自力で解決した」が多かった(図3)。実際には英語のリスニングなどを諦めている人もいて、自力で解決しようとする

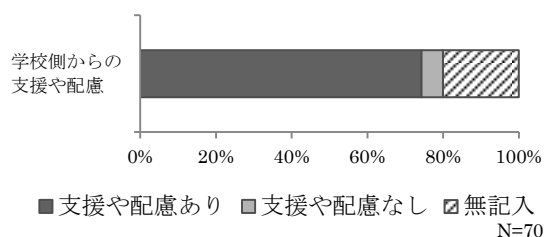


図1 学校側からの支援や配慮

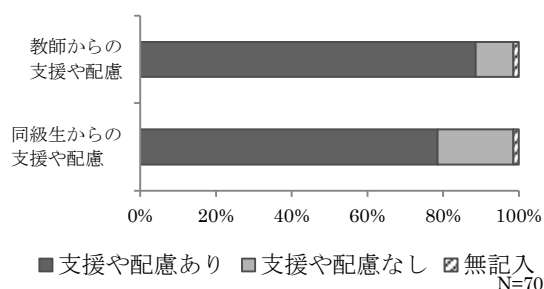


図2 授業中における支援や配慮(教師/同級生)

強量が増えるなど、他の聴生徒に比べて負担が重くなっている可能性もあり、その場合は何らかの支援や配慮があった方がよいと考える。

3 授業外のコミュニケーションについて

「静かな所で話す」など聴覚的な理解がしやすい「良条件場面」と、「うるさい所で話す」など聴覚的な理解がしにくい「悪条件場面」を設定し、会話の頻度や理解度についてたずねた。その結果、「悪条件場面」での会話の頻度が高い人が一定数みられながら(図4)、会話の理解度は「良条件場面」よりも「悪条件場面」の方が1%水準で有意に低かった($\chi^2(4)=25.139, p<.01$) (図5)。会話が理解し

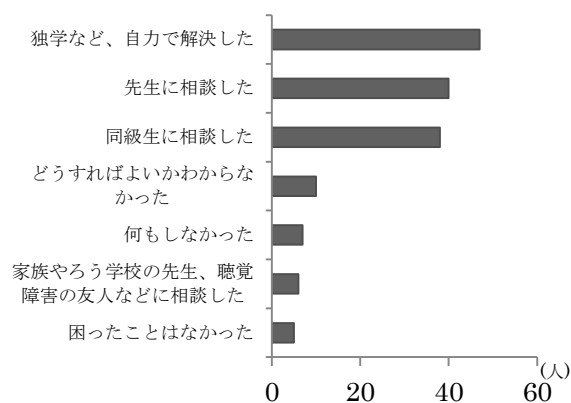


図3 授業で何らかの困難があった時の対処

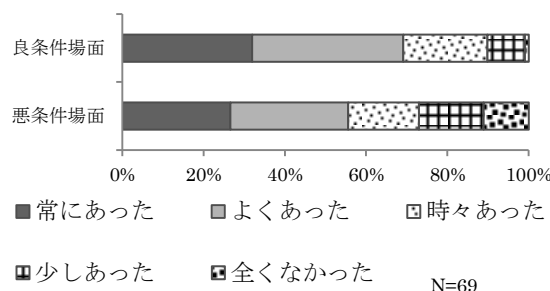


図4 場面別の会話の頻度

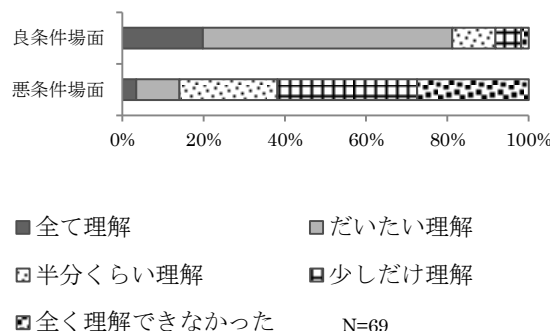


図5 場面別の会話の理解度

にくい場面が常にある人が存在し、それに対して何らかの支援や配慮が必要だと思われる。

会話の理解しやすい相手については、教師は「担任教師」、同級生は「同じ部活動をしている同級生」が多く挙げられ、かかわりの頻度が高い人ほど、会話の理解しやすい人になりやすいと考えられる。一方、会話のしにくい条件としては「早口で話すなど話し方がわかりにくい」が多かった。

4 聞こえの状態や聞こえにくさに対する対処や影響について

10 項目について 5 件法でたずねた結果、「よくある」との回答が最も多かったのは、聞こえにくさに対する対処「会話中は相手の口元を見る」(60%)であった。

一方、「よくある」との回答が最も少なかったのは聞こえの状態「先生の声が聞こえない」であった(6%)。一方で別の選択肢、聞こえの状態「先生の話がわからない」は 25%であり、「先生の声が聞こえない」より多い。このことから、聞こえの状態については、声が聞こえそのものよりも話がわからないという問題の方が多いいことが分かる。

5 その他(学校生活上の支援や配慮について)

学校生活上の支援や配慮について自由記述を求めた。その結果、要約筆記などがあればよかった、自分も支援や配慮について考えればよかったという記述がみられた。支援や配慮は十分でないという現状があるものの、必要な支援や配慮を考えたり実際に行ったりすることで、学校生活上の困難がより改善されると考えられる。

IV まとめ

高等学校における支援や配慮については、何らかの形で行われることが多かった一方で、支援や配慮を受けていない人もいた。また、コミュニケーション面では早口で話すなど、わかりにくい話し方をされるといった問題が多くみられた。

これらの問題の背景として、障害に対する理解不足、支援や配慮の必要性に対する認識不足などが考えられる。そこで、生徒のニーズに応じて必要な支援や配慮をすることが今後はますます検討されなければならないであろう。また、支援や配

慮をしやすくするための有効な手立てとしては、同級生への障害の周知などが考えられる。

今後の課題としては、高校生や軽度・中等度難聴の聴覚障害生徒を対象とした研究が必要である。

文献

- 伊東靖雄・四日市章 (1999) 通常の学級における聴覚障害高校生の学習環境. 聴覚言語障害, 28, 151-162.
- 加藤哲則・我妻敏博・藤原満 (2009) 地域の小・中学校に在籍する難聴児の実態と学校健康診断に関する調査. *Audiology Japan*, 52, 166-171.
- 文部科学省 (2012) 特別支援教育資料(平成 23 年度)<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1322973.htm>(2013 年 1 月 29 日).
- 根本匡文 (2006) 通常の小・中・高等学校における教育と支援 第 3 節 高等学校. 中野善達・根本匡文(編著), 聴覚障害教育の基本と実際, 151-157. 田研出版.
- 根本匡文・石原保志・小畑修一 (1995) 聴覚障害学生の心理的発達と経験のかかわり. 筑波技術短期大学テクノレポート, 2, 37-4.
- 日本学校保健会 (2004) 難聴児童生徒へのきこえの支援. <<http://www.gakkohoken.jp/modules/books/index.php?ct=photo&p=35>> (2013 年 1 月 29 日).
- 佐藤紀代子・杉内智子・齊藤真衣子・調所廣之 (2008) 聴覚障害児の通常学級での現状. *Audiology Japan*, 51(5), 593-594.
- 鈴木恵子・原由紀・岡本牧人 (2002) 難聴者による聴覚障害の自己評価―「きこえについての質問紙の解析」―. *Audiology Japan*, 45(6), 704-715.
- 四日市章 (2006) 聴覚障害児の言語とコミュニケーションの方法. 中野善達・根本匡文(編著), 聴覚障害教育の基本と実際, 25-40. 田研出版.